

「我が人生に、古典なかりせば」

昨年一月六日に交通事故で亡くなられた人生の師、越智直正氏は「わしに古典が無かったら、今のわしは無い」と常々語っておられました。

思案に余る難題に立ち向かう時、瞬時に決断を迫られる時、社長として、どう対処すべきかを多くの古典に学んだというのです。

人生の悩みの九十九％は解決済みだとも申されました。

越智氏は、十五歳で丁稚奉公に入り、十八歳で「孫子」を諳んじ、その後も寸暇を惜しんで古典を読み、日々の実践に活かし、靴下で大証に上場を果たしたのです。

不肖の弟子である私も、会計人という仕事柄、中小企業の社長に、どうしても「正しい判断基準」を身に付けて欲しい、「暗闇を照らす一燈」を持つてもらいたいと、古典を食るように読みました。

「読書尚友は君子の事なり」 吉田 松陰

「友を選ばば書を読みて、六分の俠気、四分の熱」 与謝野 鉄幹

「万巻の書を読み、万里を行く」 本多 静六

いずれも、我々の大先輩が読書の重要性を説いているのです。

また、「人、学ばざれば道を知らず」と礼記にあり、「学ぶに如かず」と論語にあります。二度無い、この人生を迂闊に生きないためにも、正々堂々の王道を歩んで参りたいものです。

人生の意義や仕事の目的を考え、日本人として、この与えられた命、何の為に使うべきか。それに対する明確な答えも信念もなければ、人生も仕事も全力投球できるはずがありません。「志は那邊に在りや」と、自問自答すらしなければ、もはや動物と変わらないレベルなのです。

まして、我々社長は、従業員さんの人生に責任を持つ立場にあるのです。一人従業員さんを雇うということは、その人の生涯に渡る扶養義務を持つことになるのです。社長には、自分の会社を発展させ、少しでも高い給料を払い、物心両面で幸せにしていく、崇高な使命があるのです。

古典を学べば、教養が身に付くだけではなく、健康・長寿にも良く、人相も良くなり、運まで良くなるのです。そんな人の下には、良い人が集まるものです。

社長、是非とも古典を熟読して下さい。

自分で読むのが難しければ、私どもと共に学んで下さい。

令和五年は、古典という根本に戻る初年度にして参りましょう。

今月のポイント

温故知新

